トマス・クラップのカレッジ・カリキュラム論
――「精神の陶冶」と「精神の装備」の一致――

原　圭寛（慶應義塾大学・院）
ua231150@gmail.com

はじめに

本稿は，1740-66 年にイェール・カレッジの校長及び学長を務めたトマス・クラップ(Thomas Clap, 1703-67)のカレッジ・カリキュラム論と，後の 1828 年に出されたイェール報告とを比較し，イェール報告[1]において対立的なものとして取り上げられた「精神の陶冶」(mental discipline)と「精神の装備」(mental furniture)[2]という 2 つのカレッジ教育の作用が，クラップのカレッジ・カリキュラム論においてはこれを達成するための方法及び教授内容が一致していたとの仮説を立て，検証を行う。

1828 年のイェール報告は，近代科学の流入や社会状況の変化に際し，カレッジ教育の重要性を説いた文書である。同報告では，カレッジ養育の目的を「優れた教育のための基礎を築くこと[to LAY THE FOUNDATION of a SUPERIOR EDUCATION]」[3]としたうえで，カレッジ教育の作用を，以下のように「精神の陶冶」と「精神の装備」の 2 つに分けてその論を展開した。

> 知的教養のなかで獲得されるべき二つの重要な効果は，精神の陶冶と装備である。すなわち精神の諸力を拡張し，またそこに知識を蓄えることである。二つのうち前者が，恐らくはより重要であろう。[中略]では勉学にどのような諸分野を指定し，教授様式を採用すべきかといえば，それは次のような技芸を教えるべく計算し尽くされた諸分野や教授様式をである。注意力の集中，一連の思考内容のしっかりとした方向づけ，また探求を試みる主題の分析，加えて正確な識別力をもって議論の筋をたどる力，提示された証拠と(それに基づく)判断内容とのきちんとした釣合わせ，想像力の覚醒と高揚とその制御，記憶が呼び戻す財宝の巧みな整理，そして才能の諸能力の覚醒と方向づけとを教えるべきなのである。[4]

---

[1] Committee of the Corporation and the Academical Faculty, *Reports on the Course of Instruction in Yale College* (New Heaven, 1828). 以下 *Reports* と表記。尚，訳出にあたっては以下の論文に掲載された試訳を採用し，一部表記を変更した。立川明，「イェィル・レポートのカレジ財政的観点からする解釈」，『国際基督教大学学報 I-A 教育研究』43 (2001): 1-27；立川明，「科学と文芸：イェイル・レポートを分かつもの」，『国際基督教大学学報 I-A 教育研究』46 (2004): 1-31.

[2] *Oxford English Dictionary* (以下 *OED*)によると，discipline という語は，「特定の品行及び行為へと学生を形成していくという目的を有するインストラクション(Instruction having for its aim to form the pupil to proper conduct and action)」(*OED*, 2nd ed. vol. IV, 735, “discipline,” 3.a.)という 1434-1892 年の用例が掲載されており，これに従って本稿では立川の提示する「陶冶」という訳語を採用した。また furniture に関しては，「仕事のための装置，器具，手段(Apparatus, aptitude, or instrument for work)」，その中でも非物質的なものとして，「知的能力，ないしは適性；精神及びこれと同等の表現と共にのみ(Of intellectual faculties, or aptitudes; now only with *mental* or some equivalent expression)」(*OED*, 2nd ed. vol. VI, 281, “furniture,” 5.a.)という 1561-1894 年の用例が掲載されており，これに属するものと考えられる。

[3] ここでいう「優れた教育」とは，従来の神・法・医の伝統的専門職の養成の他にも，商業，工業，農業等の職業教育までもを視野に入れたものであった。*Reports*, 6, 15-16.

[4] *Reports*, 7.

ここで言う「精神の陶冶」とは,「注意力の集中, 一連の思考内容のしっかりした方向づけ」等の「精神の諸力」を拡張させることを指しており,「精神の装備」とは，特定の職業的場面[5]での応用を踏まえて知識を学ぶことを指している。

また同報告の別の個所では,「カレッジの学士課程の学生向けの教育課程は，専門職向けの学習を含みこむようにはデザインされていない。その目的は，いかなる専門職にも固有な内容を教えることではなく，専門職全てに共通な基礎を置くことなのである」とも述べており，ここでは「精神の陶冶」＝「専門職全てに共通な基礎」,「精神の装備」＝「専門職に固有な内容」とパラフレーズされている[6]。そしてここで言うところの「専門職全てに共通な基礎」の内容としては，古典語を中心としたリベラル・アーツが想定されているのである。従って「精神の陶冶」は知識そのものよりも知識を得ることによる精神的作用をカレッジ教育の目的としており，対して「精神の装備」は知識そのものを目的としている，と解釈できる。

このイェール報告は，これまでのアメリカ高等教育史の通史の中では，植民地期カレッジのカリキュラム論を代表するものとして取り扱われてきた。例えばルーカスは，イェール報告を「伝統的古典的教育の擁護に綿密な理由付けを行った」文書として評している[7]。またテリンは，イェール報告について直接触れてはいないものの,「キリスト教的紳士」の育成が当時のカレッジ設立者の求めるものであったとしており，キングス・カレッジの使命の「精神を拡張し，知性を向上させ，人間全体を完成させ，人生のすべての高尚な場面において最も輝かしい人格を養う資格を与える」という文面を例として挙げている。更には“New Englande’s First Fruits”に挙げられた「聖職者の養成」という文面は寄付集めのための方便であると解釈している[8]。すなわちこれまでの通史上の解釈では，植民地期のカレッジは総じて精神的諸能力の向上をその目的としており,イェール報告の「精神の陶冶」という考え方は，こうしたそれまでの植民地期のカレッジを代表する考え方として捉えられてきたのである。

しかしながら近年発表されたイェール報告に関する研究においては，これとは異なる解釈が提出されている。例えばスローンやレインは，近代大学の到来を前提として，そこにカレッジを位置づけたものとしてこの文書に進歩的な側面を見出している。また立川は，こうした二者とは異なり，この文書の主眼は，財政面での支持者の拡大あるいは交代を促進して，カレッジの存続をはかる点にあるという立場をとる。更にパックは，この文書がアメリカのカレッジが共通して持つ「二重のカリキュラム戦略」(dual curricula strategy)を具現化さしたものであり，現代のカレッジに関する問題にも通じるものがあるという立場を取っている。またポッツは，ルドルフによるイェール報告批判に対して，同報告後のカレッジ入学生の増加という現象を指摘し，反論を行っている[9]。

---

[5] 前掲註 2，*OED* における“furniture”の用例を参照。

[6] *Reports*, 14.

[7] Christopher J. Lucas, *American Higher Education: A History* (New York: St. Martin’s Griffin, 1994), 132.

[8] John R. Thelin, *History of American Higher Education*, 2nd ed. (Baltimore: Johns Hopkins University Press, 2012), 24-27.

[9] Douglas Sloan, “Harmony, Chaos, and Consensus: The American College Curriculum,” *Teachers College Record* 73 no. 2 (1971): 243; Jack C. Lane, “The Yale Report of 1828 and Liberal

では，こうした解釈の違いは何故生じるのか。立川はこの原因をイェール報告の第 1 部と第 2 部の論点・性格の違いを挙げ，この第 1 部と第 2 部どちらに注目するかによって評価が分かれてくるとの見解を出している[10]。しかしながら先に挙げたいずれの研究においても，イェール報告とそれ以前のイェールのカレッジ・カリキュラム論を比較し，イェール報告の位置づけを再考するといったことは行われていない。そこで本研究では，イェールの初代学長であるクラップのカレッジ・カリキュラム論を取り上げ，イェール報告における「精神の陶冶」と「精神の装備」に通じる考え方が，クラップの中でどのように位置づいていたかを検討することにより，イェール報告の位置づけを検討したい。

1　クラップに関する先行研究

トマス・クラップは 1703 年にマサチューセッツで生まれ，1718 年にハーバードに入学し 1722 年に卒業している。1725 年にはコネティカットの教会に入り，翌年には牧師となった。そして 1740 年にイェールの 5 代目の校長となった[11]。クラップが校長に就任した当初から，コネティカットは宗教的統制を強めていき，1742 年には信仰に制約を設ける一連の法律を通過させた。クラップはこうした流れを擁護する中心人物となっていき，イェール・カレッジ内でも宗教に関する統制を強めていった。そして 1745 年には議会からイェールに対する恒久的認可状を獲得し，自らの職位を校長から学長へと改めた[12]。

クラップに関する伝記をまとめたタッカーは，クラップのカレッジ教育に対する考え方を以下のようにまとめている。

> クラップの教育理論は，知識はモラルへと向かわせられる[knowledge should be directed toward moral ends]という中世的原理に根ざしている。クラップにとって，アクィナスと同様，教育の最も重要な目的は，キリスト教的モラルを若者に植え付けることだった。現世的知識[secular knowledge]の獲得は下位のものであり，宗教的教授に欠けるカリキュラムは「価値はあるがわずかである[worth but little]」と信じていた。[13]

このようにタッカーによるクラップのカレッジ・カリキュラム論解釈は，カレッジで教授される知識そのものよりも，その知識を獲得することによる精神的作用，すなわちキリスト教的モラルの獲得を重視していたとするものであった。しかしながらタッカーは，クラップがニュートン力学をはじめとする当時の最新の自然科学を積極的に取り入れ，さらに

Education: A Neorepublican Manifesto," *History of Education Quarterly* 27 no. 3 (1987), 336; 立川，「イェィル・レポートのカレジ財政的観点からする解釈」，2; Michael S. Pak, "The Yale Report of 1828: A New Reading and New Implications," *History of Education Quarterly* 48 no. 1 (2008): 42-47; David B. Potts, "Curriculum and Enrollment: Assessing the Popularity of Antebellum College," in *The American College in the Nineteenth Century* ed. by Roger Geiger (Nashville: Vanderbilt University Press, 2000), 37-45.

[10] 立川，「科学と文芸」，2，5-6，12-13.

[11] Louis L. Tucker, *Puritan Protagonist: President Thomas Clap of Yale College* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1962), chap. 1-4.

[12] Richard Hofstadter, "IV: Religion, Reason, and Revolution," in *The Development of Academic Freedom* by Richard Hofstadter and Walter P. Metzger (New York: Columbia University Press, 1955), 163-71. 訳出にあたっては以下を参照した。R. ホフスタッター，『学問の自由の歴史 I：カレッジの時代』，井門富二夫，藤田文子訳（東京大学出版会，1980）.

[13] Tucker, *Puritan Protagonist*, 79.

英国法や航海術，測量術などといった実用的な科目をカリキュラムに加えるといったことも行っていた，とも述べている[14]。こうしたクラップの取り組みは，先に挙げたタッカーによるクラップの教育理論解釈の中にどのように位置づくのかが疑問であるが，タッカーはこの点については特に説明を加えていない。

そこで本稿では，そもそもクラップのカレッジ・カリキュラムは知識の獲得による精神的作用を主目的に据えいたのか，また先に挙げた実用的な科目・講義がクラップのカレッジ・カリキュラム論においてはどのように説明され得るのか，という点について検討を行う。

2　クラップのカレッジ・カリキュラム論と当時のイェールのカリキュラム

2.1　カレッジ教育の目的と学長の仕事

クラップがカレッジ・カリキュラム及びその目的について論じたものとして代表的なものは，*The Religious Constitution of College*（1754：以下 *Constitution* と表記）と *Annals or History of Yale College*（1766：以下 *Annals* と表記）の補論が挙げられる。前者は同時期に宗派カレッジ批判を展開していたジョセフ・ノイス牧師に対する反論を試みた文書であり[15]，後者はクラップが学長在任最後の年にそれまでのイェールの歴史をまとめ，その補論として現在のカリキュラムに解説を加えたものである。

クラップは *Constitution* の冒頭において，当時の宗派カレッジ批判の際によく引き合いに出されていたスコットランドの大学の特徴を述べたうえで，こうした大学像に対して以下のように反論している。

> 宗教的敬愛，安息日の説教及び講義は，牧師の教育において，最も重要なパートの１つである；より避けがたいことに，それは他のいずれの教育でもなく，カレッジの権限のもとに管理されなくてはならない。説教[the Preaching]は，<u>他者の指導者</u>としての資格を認められた，優れた能力に，相応しい。[16]

このような論旨の基，以降クラップは *Constitution* において，カレッジの学位授与機関としての独立性，説教の社会的重要性の観点から，カレッジが聖職者養成を管理すべきとの論を展開している。

そしてこの目的を達成するための学長の仕事及びカレッジの在り方として，クラップは以下のように述べている。

> 彼ら[学生]は<u>学長</u>に，以下のことを求める；彼ら自身と，他の者の助力とともに；神学の，教授の，仕事を行うこと；毎週日曜に，カレッジ・ホールでの，説教によって。ここにお

[14] Ibid., chap. 4-5. 尚ケリーによるイェール史においては，クラップについてはおおむねタッカーによるものが参照されており，カリキュラムについては主にこうした自然科学の強化や，英語による討論の導入が述べられているのみである。Brooks M. Kelley, *Yale: A History* (New Heaven, Yale University Press, 1974), 78ff.

[15] Tucker, *Puritan Protagonist*, 183.

[16] *Constitution*, 111-12, cited in *American Higher Education: A Documentary History*, vol. 1, ed. by Richard Hofstadter and Wilson Smith (Chicago: The University of Chicago Press, 1961), 111-17. 引用文中の下線は原文のイタリック体を示す。以下同様。

いて，カレッジ，及び大学の，原初の本質，意図，そして実践が，十分に保証される；(これは，宗教的目的にとって，優れた団体である；)そして議会の，法の，条項において[も定められているものである]；従って，学生は，こうした説教や，講義によって，最も相応しい，彼らの能力，状態，意図において優位に立つだろう。[17]

教義と訓練[Doctrine and Discipline]がこのカレッジの設立者の主要なデザインであった；(これは人々の精神の，そして体のためのものである；) そして，このデザインは，これを継ぐ者は追及する義務がある。[18]

このように，クラップはカレッジの目的として聖職者の養成を挙げ，これに対するカレッジおよび学長の在り方を示している。こうした文言を見ていくと，確かにタッカーの解釈のように，知識の獲得による精神的作用を重視しているように読むことができる。しかしながら実際にクラップの設定したカリキュラムを見ていくと，こうした解釈では説明できない部分が見受けられる。

2.2 イェールのカリキュラムと日曜の講義

イェールの 18 世紀中の開講科目は，ラテン語，ギリシャ語，ヘブライ語といった古典語を中心として，論理学，形而上学，数学，物理学，修辞学，弁論，神学，美学といった科目が行われ，これらの科目は，基本的に特定のテクストを記憶し，復唱するという形式であった。これに加えて，討論の時間が設けられていた[19]。このような科目構成も，精神的作用を重視したものと考えられがちである。しかしながら当時のカリキュラムには，先に述べたとおりこれに加えて度々航海術や測量術といった実用的な科目が組み込まれており[20]，必ずしも精神的作用のみを重視していたとは言えない。

また，当時のイェールは日曜の礼拝への出席が全学生に義務づけられていたが，その後には学長自らが講義を行う時間が設定されていた。この講義をクラップは重視しており，その内容はタッカーによると，「英国法（公法，市民法，教会法，軍事法，海洋法)，農業，商業，航海術，解剖学，紋章学，砲術」に至るまで，非常に実用的かつ多岐にわたるものであった[21]。

こうした多岐にわたる講義については，*Annals* の補論においてクラップ自身が以下のように解説をしている。

ここで講義されることの全ては，少なくとも，人生における重要な問題一つ一つにおける一般的かつ表面的な知識であろう；これらの本から直接[知識を]得ることで特にアーツ・アンド・サイエンスのより完全な知識を得ることができ，これは学生本人の才能と職(Genius and Profession)にとって最も良いことである。[22]

---

[17] Ibid., 113.
[18] Ibid., 114.
[19] Kelly, *Yale*, 41-42.
[20] Tucker, *Puritan Protagonist*, 80.
[21] Ibid.
[22] *Annals*, 85.

このようにクラップは，この広範な内容の講義についても，「学生本人の才能」に加えて，聖職者という「職」にとって不可欠な知識として，その知識そのものの獲得・利用を視野に入れているのである。ここでは，知識の獲得そのものはタッカーの言うような教育目的における「下位のもの」ではなく，精神的作用と並置されて論じられているのである。こうしたクラップの言動は，以下のカレッジ・カリキュラムや討論に関するクラップの見解にも表れてくる。

> [討論の時間は]彼らの才能により偉大なる知的能力を与え，公共の諸問題[Publik Affairs]に対処する際に人間に共通の利用と実践[common Ufe and Practice of Mankind］により適応的になる。[23]

> [カレッジでの教育は]彼らの精神に，真の宗教の原則に，教義と実践に，公共及び私的文脈，個人的会話によって注意が払われている。[24]

このように，特に *Annals* においては知識獲得による精神的作用と知識の獲得・利用の価値が並置されて論じられており，両者に関して優劣をつけるような論述はされていない。さらにこの両者は同一の科目において，同一の方法で以て達成されるのである。

先に挙げたタッカーは，*Constitution* においてクラップが「現世的知識の獲得は下位のものであり，宗教的教授に欠けるカリキュラムは「価値はあるがわずかである」と信じていた」[25]と述べていたが，実際に *Constitution* でクラップが述べた部分を直接引用すると，以下のようになる：「アーツ・アンド・サイエンシズの知識がいかに素晴らしくても，それ[=宗教的教授]を抜きにしては，比較的価値はあるもののわずかとなる」[26]。すなわち現世的知識の有用性を認めつつも，その前提として宗教的教授を含みこむことでその価値はさらに増す，という文脈でクラップはこのように述べているとも解釈が可能であり，クラップの「現世的知識の獲得は下位のものである」とするこの部分の解釈は，*Annals* との整合性の面からも妥当とは言い難い。

こうしたカリキュラムの目的は先に確認した通り聖職者養成であるが，このような広範な知識の獲得と聖職者という職に関しては，どのような関連があったのだろうか。何故聖職者となるために，聖書読解に必須の古典語のみならず，このような広範な知識が求められたのであろうか。これには，聖職者を取り巻く当時の社会情勢を考慮に入れる必要がある。

3　社会の主導者としての聖職者とクラップのカレッジ・カリキュラム論

3.1　当時のアメリカ社会における聖職者の役割

キンボールによると，植民地期のアメリカは「神権政治」(“theocracy”)と言っていいほどに宗教が政治を支配していた，との言説もある。このような言説は極端な例ではあるが，

---

[23] Ibid., 82.
[24] Ibid., 83.
[25] Tucker, *Puritan Protagonist*, 79.
[26] *Constitution*, 114.

当時のアメリカ社会で聖職者が担う役割はそれほどにまで広範であり，聖職者が政治・経済・社会に与える影響は非常に大きかった。例えば政治に関しては，教会における説教によって公式に，また政治家や役人に私的に意見を求められることで非公式に，その影響力を行使していた。また当時はミサへの出席は法的に義務付けられており，教会内における席の場所は決まっており，教区の人々のヒエラルキーをそのまま反映したものとなっていた。経済に関しては，教会によって経済活動を制限することも可能であり，高利貸しの禁止や商人による過剰な利潤の搾取は禁じられていた。更には，当時は聖職者と法曹の仕事の区別も曖昧であり，聖職者がその地域の法曹を兼ねるような状態も生じていた[27]。

こうした聖職者の当時のアメリカ社会における広範に亘る役割を考えると，この時期のカリキュラムによって得た知識は，聖職者養成のために，学ぶ知識そのものとしても重要であったと言えよう。法学については当時の法曹との仕事の区分の曖昧さから考えればその知識の必要性は容易に想像がつく。またその他の農業・商業・航海術といった実利的な講義についても様々な場面で意見を求められることが想定される社会を主導立場としての聖職者にとっては，必要な知識であったと言える。そしてこうした講義の基盤として，正課科目における数学や物理学，弁論等があったものと考えられるのである。クラップのカレッジ・カリキュラムは，このような聖職者の多岐にわたる活躍の場を考慮したうえで組まれたものであったと推測でき，そのためこうした多岐に渡る知識は，その精神的作用のみならず，知識そのものとしても重要だったのである。

では，植民地期のアメリカにおいて聖職者はなぜここまで広範な役割を担うに至ったのか。これにはアメリカ，特にニューイングランドへのイギリスからの入植者の「宗教的動機の深さと幅広さ」[28]に由来する。

グリーンによれば，マサチューセッツ・コネティカット・ニューヘヴンの 3 つの植民地においては，キリスト教の理念の下での「秩序だった共同体を設立するということに非常に大きな強調点を置いた」。この 3 地域において「教会や家族や共同体や教育機関のみならず，政府にも活力と権威を与えたのは，多数の世俗ならびに聖職の指導者のきわめて目立った支配集団だった」。そして「これらのまとまっていて固く結びついた入植地では，宗教的志向や共同体的欲動，完全主義的な向上心や神の選びの民の意識が強く，人々が社会的，宗教的排他性をと統一性の必要を信じ，近代的商業社会に対して懐疑的で」あった[29]。

このように，アメリカへの入植にあたっては，特にニューイングランドにおいては宗教的共同体への志向性が強く，そのため聖職者は先に述べたような広範な役割を担うに至った。このような状況下で設立されたハーバード，イェール等のカレッジは，聖職者養成のための機関として社会的に注目されていたと言えよう。先に述べたように，こうした解釈に対してテリンは疑問を呈しており，聖職者の養成はカレッジの最大の関心事ではなかったとの主張を展開している[30]。しかしながら当時の社会的状況やハーバード・イェールの

---

[27] Bruce A. Kimball, *The "True Professional Ideal" in America: A History* (Cambridge: Blackwell, 1992), 46-54, 109, 304.

[28] Jack P. Greene, *Pursuits of Happiness: The Social Development of Early Modern British Colonies and the Formation of American Culture* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1988), 21. 訳出にあたっては以下を参照した。ジャック・P・グリーン,『幸福の追求：イギリス領植民地期アメリカの社会史』，大森雄太郎訳（東京：慶應義塾大学出版会，2013）.

[29] Ibid., 22-23, 52.

[30] Thelin, *History of American Higher Education*, 24-27

卒業生の大多数が聖職者となっていたことを考慮すると，この時期までのカレッジでの勉学は，聖職者となるための過程の一つとして社会的に認められていたと考えられよう。

3.2　18 世紀コネティカットの宗教的特殊性とクラップのカレッジ論

こうしたニューイングランド地域及びカレッジの宗教的特性は, 18 世紀に入ると弱まっていく[31]。しかしコネティカットにおいては，公認宗教制度と非公認宗派に対する抑圧が 18 世紀中葉以降活発になっていく。

ホフスタッターによると，コネティカット植民地では 1708 年に信仰告白と教会規律が採用されたが,「公認宗教の維持に協力するかぎりは,独自の信仰を持つ自由が与えられて」おり，大覚醒を迎えるまでは比較的寛容な態度を取っていた。従って信仰復興運動が生じた際にも，その精神自体に大きな反論は無かったが，運動の方法に対して批判が集まり，こうした運動を抑圧するようになる。更には大覚醒に伴い公認教会が二分し，教会解体の危機が出てくると，この公認教会の「分離派」と呼ばれる一派に対しては不寛容な立場をとる。そして 1742 年には，コネティカット議会は信仰に対して制約を設ける一連の法案を可決させた[32]。このような状況下でコネティカットにおいては地域及びカレッジの宗教的特性は維持され，その中でイェールも 17 世紀中のハーバード[33]と同様，社会的主導者としての聖職者養成を主たる目的として発展していった。

こうしたイェールの方向性ついて，ホフスタッターは以下のように述べている。

> アメリカでは，カレッジが発達するにつれて，思想の自由が目標として意識的に掲げられたが，それは，はじめは，学生のための宗教的自由であった。まだ教師の自由などということを誰もいい出せない 18 世紀には，学生の宗教的自由は，カレッジのすぐれた財産として自慢されるのが普通であった。[中略]他方，クラップ学長時代のイェールのように，この指導原則をまっこうから踏みにじったカレッジは，その違反行為のために苦労することとなった。[34]

このようにクラップのカレッジの考え方は，当時の潮流からすれば非常に保守的かつ時代遅れであるとの評価をホフスタッターは下している。しかしホフスタッターは一方で，こうしたクラップの考え方は「コネティカットの宗教的基盤に根ざして」おり，またメーザー時代のハーバードとの共通点が多いことを指摘している[35]。従ってクラップのカレッジ・カリキュラム論はその一世代前，すなわち 17 世紀及び 18 世紀初頭までのカレッジの在り方としては普遍的なものであったと言えよう。

---

[31] Greene, *Pursuits of Happiness*, chap. 3.
[32] Hofstadter, “Religion, Reason, and Revolution,” 165-67.
[33] 対してハーバードは，18 世紀中葉にさしかかると卒業生の聖職者の割合が徐々に減少し始める。しかしながら先に示したホフスタッターの言葉通り，当時のイェールはメーザー学長時代のハーバードと酷似しており(Ibid., 165)，イェールの発展はハーバードの発展を一世代後から追いかけているとも言えよう。
[34] Ibid., 152.
[35] Ibid., 165.

おわりに

本稿ではこれまで，トマス・クラップのカレッジ・カリキュラムの特徴とその背景について考察を進めてきたが，これとイェール報告におけるカレッジ・カリキュラム論を比較すると，以下のような共通点と差異が見出される。

共通点としては，クラップの論も，イェール報告で言うところの「精神の陶冶」という側面と「精神の装備」という側面の双方が見出される点である。例えばクラップは，カレッジ教育の目的を語る際に，「教義」や「訓練」といった言葉や，「キリスト教的紳士」といった言葉を用い，カレッジ教育による学生の精神的諸能力の向上を強調している。こうした考え方は，イェール報告における「精神の陶冶」という考え方と共通していると言える。またクラップは，リベラル・アーツの知識が，学生が将来就くであろう「職」（ここでは聖職者のこと）にとって必要であると述べていたり，法学や農業をはじめとする実利的な講義・科目を積極的に取り入れていたりした。これはコネティカット植民地における社会的指導者としての聖職者の実践にとって必要な知識として教授されていた。これはイェール報告における「精神の装備」の考え方と共通する。

しかしながらクラップは，カレッジ教育において専門職に固有な教授を避け，「精神の陶冶」を「精神の装備」に対し優越させたイェール報告の論とは異なり，コネティカット植民地の社会的主導者たる聖職者を養成することをその主眼に置いたうえで,「精神の陶冶」的考え方と「精神の装備」的考え方を並置させて論じていた。更にはイェール報告においては「精神の陶冶」のための科目としてリベラル・アーツを,「精神の装備」のための科目としてそれ以外の実利的な科目を捉えていたのに対し，クラップの場合はその区別もしていなかったと考えられる。これは日曜の講義の効用について,「学生の才能と職」双方に有益であるとの見解を示している点に顕著に表れている。すなわちクラップの論では，イェール報告に見られる「精神の陶冶」と「精神の装備」双方に準ずる考え方は，その方法及び教授の内容は一致していたと考えられるのである。

以上のことから，イェール報告がそれまでの植民地カレッジの考え方をまとめたうえで，それを保守するために提出された文章であるとするこれまでの通史上の解釈は妥当でないことがわかる。少なくともクラップの理論は,「精神の陶冶」と「精神の装備」に相当する考え方をはっきりと分離させてはおらず，これらに優先順位をつけるというようなことも行っていなかったためである。さらにカレッジ教育の目的を聖職者養成にはっきりと限定させており，この点でも様々な職業にその成果を応用可能であるとしたイェール報告の立場とは大きく異なるのである。

このような解釈は，テリンの高等教育史通史における植民地期のカレッジの記述とは大きく異なる。先に述べたとおりテリンは，植民地期のカレッジは聖職者養成を主たる目的としていなかったと主張しており，その根拠としてカレッジが神学の学位を授与しておらず，牧師や司祭の叙任もしていなかったという点を挙げている[36]。しかしながら表 1 に挙げるように，少なくとも 18 世紀初頭まではカレッジ卒業生の半数以上が聖職者となっていた点，またカレッジにおけるリベラル・アーツが，聖職者という職にとっても重要であるとするクラップの論を考えると，聖職者養成はやはりカレッジの重要な役割の一つであ

[36] Thelin, *A History of America Higher Education*, 27.

ったと考えるべきであろう。

表 1　18-19 世紀中のカレッジ卒業生の動向(%)[37]

卒業年	イェール				リベラル・アーツ・カレッジ全体			
	神	法	医	計	神	法	医	計
1701-1725*1	59.5	2.7	2.7	64.9	53.8	2.8	7.8	64.4
1726-1750	45.6	7.5	8.9	62.0	43.2	6.3	10.1	59.6
1751-1775	35.7	11.5	11.6	60.6	33.8	13.0	12.4	59.2
1776-1800*2	24.4	31.2	11.7	67.3	20.9	27.5	10.0	58.4
1801-1825*2	n/a				15.0	28.2	13.6	56.8
1825-1850*2	n/a				17.7	26.8	11.4	55.9

では，何故イェール報告においては，「精神の陶冶」と「精神の装備」は別のものとして考えられ，その中でも「精神の陶冶」が優先されるようになったのであろうか。この点を検討するためには，その後の聖職者の地位の変化を追う必要がある。

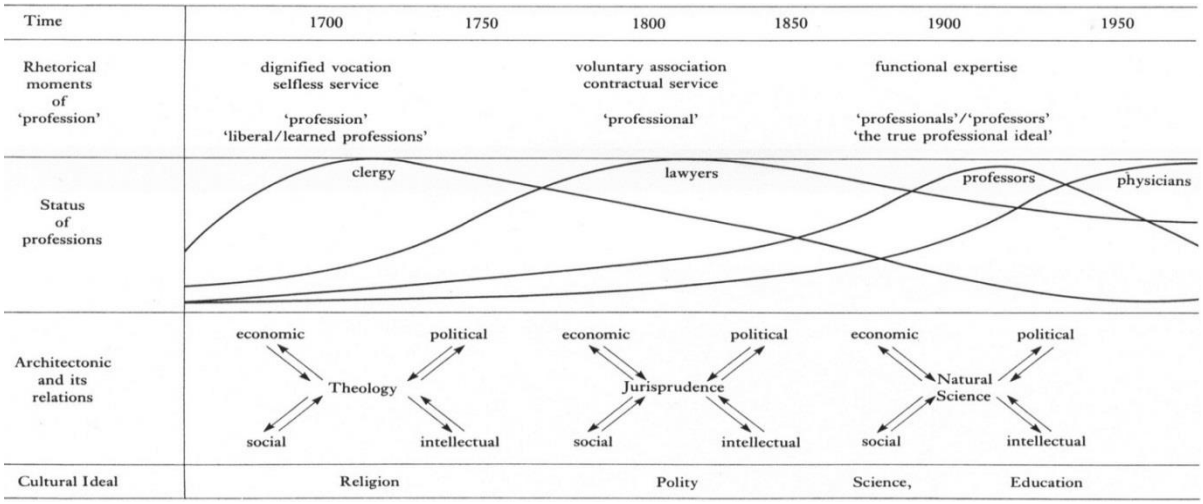

図 1　専門職理念の変遷[38]

18 世紀後半，ジェファーソンやジャクソンの時代となると，アメリカにおいては政教分離の機運が徐々に高まり，また自由経済という考え方が徐々に浸透していった。こうした状況下で，聖職者は徐々にではあるがその地位を低下させ始め，代わりに自由経済のもとで利害の調整者という役割が重視された結果，法曹がその地位を上昇させ始めた[39]。こうした専門職の地位の変動をキンボールは，図 1 のように図式化している。図 1 で示された通り，18 世紀後半には社会の中心が神学から法学へと変化していった。それに伴って 18 世紀後半の聖職者が法曹に転身する例なども見られ[40]，これに伴って社会を主導する役割を担う職業が，聖職者から法曹へと移っていったと考えられる。実際に表 1 の通り，カレッジ卒業生のうちの聖職者の割合も，この頃から徐々に減少している。

[37] Bailey B. Burritt, *Professional Distribution of College and University Graduates* (Washington: Government Printing Office, 1912), 86 table 9, 143 table 68 より筆者作成。尚，イェールに関しては最初の卒業生輩出は 1702 年である(*1)。また 1792 年以降はデータが欠落している(*2)。

[38] Ibid., 304, Figure 5.1.

[39] Kimball, *True Professional Ideal*, 107ff.

[40] Ibid., 120.

こうした変化に応じて，イェールのカリキュラム論がどのように変化し，イェール報告のような形に至ったのかについては，特にクラップの後の学長である E. スティールズ(Ezra Stiles, 学長在位 1778-95)のカレッジ論や，その当時の社会の変化をより詳細に検討する必要がある。これについては，今後の課題としてここに提示するにとどめる。